

# 芳賀矢一の国学観とドイツ文献学

佐野晴夫

文学を専攻した学徒間で、自明のこととされながらも、いま一つ判然としない学術用語で、日本学・中国学・ロマン学・ゲルマン学等と言った一連の用語に出会った時、戸惑いを覚える。ドイツ語学・ドイツ文学を主専攻した人達はゲルマニストと自称し、自分たちの研究領域をゲルマニスティックと呼んでいる。それらの用語法には誤りがない。けれども、自明の事実とされているだけで、彼等自身明確にその用語の意義を心得ているのであろうか。そして日本学、中国学等と同じようにドイツ学と称すべきものであるか、考察してみたい。ドイツの某大学の日本学研究室で最初に日本語ならびに日本の文化を紹介し、指導した邦人が古代服装史を中心に研究していた学者であったことから、その大学の卒業生には文学や政治経済の知識が乏しく、就職の際にも苦労した者が多かったと笑ってすごせない事実を聞いたことがある。

いま、ここでは、直接にゲルマニスト、ゲルマニスティックの語義を考究することも重要な手段であるけれども、本来、ドイツ語とドイツ文学と無縁ながら、ドイツ文芸学の一端を学び、対峙した一人の日本文学者芳賀矢一を例に、ゲルマン学をどう理解し、学術的本質の考究から、そのエッセンスを自国の文学研究へ同化しえたのかを観てみたい。しかも、併せて最も日本学の骨格を形成する国学を伝承する家柄に生まれ、かつ近代日本の新しい文化と歴史の発展のために、最も特殊で異質と思われる泰西のゲルマン学を学び、和学の新生の手がかりを獲得しようと留学し、収穫多く帰国し、斬新な学識を同時代の人々と共有し、さらに未生の種子を同学の次世代の研究者に頒布して委ねた過程を確認し、新しい国家観の設立にまで扶助することになった学術成立の道程の一端を観てみたい。

まず、ここでは、芳賀矢一の国学に対する基本的立場とその認識の輪郭がどの様なものであったか、東京大学助教授で文学史攻究法研究を目的に満1年半ドイツへ留学する直前に国語伝習所で行なった講義より、友人達が出発後まとめて上板した「国学史概論」(明33、11、国語伝習所)で読み取れる。それを

要約するならば、次の様になるであろう。

「国学といふ名称」は、「洋学者漢学者といふに対して国学者といふ学者がある」という前提から、国学は国典研究の学であることを是認する。だが、周知の如く、この国典は一通りのものではなく、専門とするところが分かれる。そこで、「国学者といふ中には文典を研究する文法学者もある。古言などを調べて居る人もある。さういふ語学者とは違つて、古い物語を読んで居る人もある。古い歌、古い文章を作つて別段社会に向つては著しい感化力のないやうな人もある。それらも世間では国学者と名付ける。或は又神道を研究する人もあり、有職故実の学問を調べる人も国学者と名つけられる。国学といふ一つの名はあるが専門は種々に別れて居ります<sup>(1)</sup>」と、明治33年8月の国語伝習所の夏期講習会の席で平明な説明を行なつた。この分類の知識は、芳賀矢一が師事した小中村清矩の思弁に負うものと思われる。小中村清矩によれば、国学の本質は、日本並びに日本人に関する事実を知ることと言詞を知ることにある。事実を知るといふことは、つまり、日本書紀・古事記以来の古書を通じて、まずわが国の国体を認識し、歴代の制度や事物の沿革を考察することであり、言詞を知るとは、祝詞・紀記・万葉集等から、詞と文章の変遷を考究し、さらに漢詩文との混淆までも考究しようとすることである。その2大部門に帰する分野を細別して、得意とする領域の国学者を6家に分類している。<sup>(2)</sup> (1)古学家(本居宣長の言う神道者に相当する)(2)歌物語家(古体家・近体家)(3)語学家(4)有職故実家(公家故実家・武家故実家)(5)考証家(6)歴史家からなり、5番目の考証学は宣長の頃は未発達で、幕末になって台頭してきた分野であり、また6番目の歴史家も国学者の中へ算入しないことが多々あった。この様な考え方を踏襲して、芳賀矢一は心得ていた筈である。

そして国学の本質と仕事の範囲が明らかになると、芳賀矢一の近世国学の史的研究の関心は、国学の祖は誰であるかに移る。小中村清矩が「国学の前途」で、平田篤胤の王樛卷九で、古道の大義に深く心を入れた人物という観点から荷田春満(1669-1736)こそ最初であると考えたことに倣っている。勿論、芳賀矢一は、国学が元禄期(17世紀末)に自然をありのままに詠むことを唱えて因習的伝統を踏襲する歌学を批判した戸田茂睡と、また古典に対する仏教的・儒教的な解釈を排斥して文献的な研究を推進しようとした契沖とともに生まれたことは承知している。だが、それは最大の徴表となりえなかつた。芳賀矢一は著書「国学史概論」で、〈古学〉を鍵言葉にして、「春満がはじめて国家的精神を以て古学を研究した人であります。後世から見れば、契沖始め、其他に沢

山の人も皆国学者といつてよろしい。但しいはゆる国学の創始者としては春満を推さねばなりませぬ<sup>(3)</sup>」と主張する。と言うのも、享保期（18世紀前葉）に、古代日本人の精神を究明するための古典研究を企てた荷田春満に注目し、彼の提唱した古道を提唱した歴史的事実を評価したからこそである。京都伏見稲荷の社家羽倉家に生まれた荷田春満の先駆的工作があって、初めて門人の賀茂真淵が仏教的禁欲や儒教的人為を欠く大らかな自然な人間本来の存在様式を古道と見做して、『万葉集』の中に求めた。また賀茂真淵の門弟本居宣長が漢意を退け、古道をつたえる『古事記』『日本書紀』『万葉集』を学ぶことを唱え、加えて『源氏物語』等の研究を勧めた。そこに仏教や儒教の影響を受けない純粹の日本人の古代精神を発見しえた。その文献学的研究態度を継承したのが伴信友で、考証学に徹した。また本居宣長の思想的側面に感化されて、古道の思弁に宗教性を加えて、復古神道として発展させた。そして神秘的国粹主義の色彩を帯びながら、江戸時代後期には平田篤胤派や大国隆正派の国学は地方の神官や豪農や豪商の間に草莽の国学として広がって行き、幕末には尊王攘夷の運動へ多大の影響を与えた。上記の分類と略譜によって国学の輪郭全体がうかがい知ることが出来る。春満・真淵・宣長そして篤胤の4人を国学の四大人と称しているが、筆頭の人物こそ古義学の影響を受けながら国学の領域を拡大して、文献学の契沖には欠けている道徳的情熱さへもこめて、外来思想の影響を廃し、古語と古歌から帰納的に理解した日本古代の精神を〈古道〉と位置付けて、その境位への復帰を理想に掲げる学術へまで高めたからである。

国学者の多くが排斥の矛先を漢意（からごころ）へ向けていたけれども、驚くことに、洋学と蘭学へ素朴な興味を抱いている。賀茂真淵は「国意考」でオランダ文字が漢字に比して便利なことを指摘しているのをはじめ、本居宣長もオランダの月名や干支を『玉勝間』巻2で取り上げて、蘭語の本質をとらえようとする姿勢が見える。蘭学に関心を示した者に平田篤胤、野々口隆正、岡熊臣等の名前を挙げる事が出来るけれども、実際に蘭語を学習した学者としては、津和野藩の蘭医でもあった小篠敏、さらに文学の面になると、クラヂウス詩「五月の歌」の翻訳者中島広足くらいであった。この系譜に則って、日本古来の伝統と新時代の知識と技術との和解と調和を目指す時代がやって来た。だが、古い革に新しい酒を盛る様な努力をすることは許されない。最も旧弊な訓詁学に終始しているかの観のあった国文学において、見事に和洋を折衷して成功をおさめた好例があり、それが芳賀矢一である。彼が口述した3回目の刊行物の冒頭で「余が、ここで所謂『日本文献学』とは *Japanische Philologie*

の意味で、即ち国学のことである<sup>(4)</sup>」と確言する。

芳賀矢一は国学者芳賀真咲（天保12- 明治39）とあき（戸籍上わき）との間の長男として福井市佐佳枝上町32番地に生まれたが、清和源氏の流れを汲む4代前の三左衛門孟の代に福井藩家老職をつとめる狛家の家臣（陪臣）として伊勢より移り住んだ。彼の一族の家学から、一見、有力な家門である結城松平の藩校明道館の成立と関係があると考えられる。しかし、近世藩校研究者の第一人者で元福井大学教授笠井助治の一連の著作の中で検索するとき、3代前の芳賀三左衛門宗行の名前の記録も、一族の業績も見当たらない。<sup>(5)</sup> やっと芳賀矢一自らも関わった3巻からなる「国学者伝記集成」続編の中で、父親の真咲と矢一の経歴等が記されているにすぎない。祖父の依男に倣い、父親の真咲は和歌を橘曙覧に学び、また平田鉄胤の門に入って皇学を修め、著書として「語法指南」「土佐日記読本」「松島案内」「孔舎農家詠草1巻」があり、また「筍」と題する詠草の中に「生いてしはきのふはかりと思ひしをいくよかのひしかきの筍」という1首が挙げてある。<sup>(6)</sup>

福井藩は徳川家康の次子結城秀康が慶長5年（1600）越前国主68万石に封せられ子孫相承（様々な理由で、のちに32万石）した將軍の家門として重きをなしていたが、学塾創設は意外に遅く、米商人内藤喜右衛門の献金と学問所建設の請願により、文政2年（1819）に藩主松平治好は城下桜の馬場に正義堂を設けた。藩儒雲洞こと前田彦次郎を総督に、句読師数名を置き、領内の藩士及び平民に入学を許した。これとは別に毎月六回日を定めて、藩儒高野春華と清田松堂が経書を講説した。16代春嶽こと松平慶永は藩政刷新と国運開発を目的に、さらなる学問教育の振興を熱望して、教育と政治、学問と事業の観点から藩士子弟の人格陶冶を目指して安政2年（1855）に城内三の丸に新たに藩校を建営して明道館と称した。高野真斉を教授とし、前田万吉、吉田悌蔵、徳山唯一の3名を助教に任じた。安政4年には、橋本左内が明道館御用掛学監同様心得に就任し、ついで蘭学科を拡張して洋学所に昇格させ、侍医坪井信良を医学所教導兼洋学所教導に任命した。明治維新前の教科目では、漢学・国学・習字・算術・医学・洋学であったが、やがて武芸諸道場を館内に集めて、文武両道の藩校教育運営を目指すようになったが、明治2年に明道館が明新館と改称され、また学校拡張のため旧城内下馬門に移されるようになると、教科目は皇学・漢学・洋学・兵学・書学・図画・数学に分けられていた。そして明新館は外塾、小学校、中学校の学校系統へ整備され、四民に開放され、外国人教師を招聘して外国語や新しい知識や技術を伝授して、漸次近代学校へと脱皮していった。

芳賀一族は鼎居派の国学を学び、講じてきた家柄ではあったが、越前の福井藩校史では主流を成すものではなかった。藩の建前から、藩校の学統も朱子学が中心にあり、これに闇斎学派と江戸昌平学派が加わっていたと、笠井助治は指摘している。芳賀家の学問は、儒学そのものではなく、下記の如く、皇学に分類されるべき範疇であった。藩校の教育は藩士の文武両道に達した儒教的な道徳的人間の形成を目指すことにあり、教科内容の中核をなすものこそ儒学であって、教科としての漢学であった。目指すものは祖父芳賀依男や真咲が心血を注いで学習した古学、詠歌等の「やまごころ」の神髓の修得ではなかった。藩校では、本来、皇学は漢学に累加されてきた習字、算学、天文学、音楽等と同等の副次的な教科にすぎなかった。歴史的に観て、安永2年(1773)鹿兒島藩造士館で最初の皇学の設置が実現して以来、他藩でも皇学の名称が見受けられる様になった。それまでは漢学科の読書参考書として「日本書紀」や「六国史」を取り上げることがあっても、わが国の歴史、社会、制度、古典等を学ぶ和学の独自の地位は全く認められていなかった。和学・日本学が皇学の名称のもとで各藩で急増し、一般化する様になった事情は、文官としての実学優先主義に竿をさし、尊皇攘夷の思想や国学の発達と結びつきながら、国民的自覚や皇国固有の国家観の醸成を齎した時期と合致する。藩によっては、和学として詠歌、皇学として令義解や延喜式の講読、そして卜部家に倣って教科書に中臣祓や神代巻を選び、古事記や旧事記を参考書とする神道の3教科を教授した。一般的には、和学と皇学を併合した広域分野の内容を含むものであった。この様な藩校教科の拡大変更の中で、芳賀三左衛門孟が伊勢国から越前国へ招聘を受けたと言ってよい。そしてやっと明治3年(1870)頃、父親真咲は福井藩武学所の少訓蒙や外塾規則改正取調掛を勤めていたと言う。

さて、芳賀矢一が東京大学で国文学科を専攻することになったのは、自然な成り行きであった。明治の新時代の目まぐるしい学校制度の改革の中で、父親真咲が教育現場を去り、地方行政の役人として、新潟県高田市や宮城県へ赴任する間、矢一少年は各地の小学校、中学校の転校を重ねた。さらには上京後も数学教師に疎まれ、短期日で別の予備門を経て、第一高等学校へ入学することになったが、幼時より一貫して、彼の国文学への興味は薄れることなく、また友人達と和歌や漢詩の創作にも熱意を示していた。本来の和学に対する最大の関心にもかかわらず、他方、洋学に対しても無関心ではなかった。彼は高等学校では、英語を中心とする生徒であったが、無論、ドイツ語も学んだ。しかし、彼が、ドイツ語と出会ったのは、ここが初めてではなかった。というのは、12

歳の時、親族の助言もあり、医師を志してドイツ語の初歩を学習したことがあった。また大学卒業してから、西周の独逸学協会学校で国文と国史の教師として嘱託になったこともあり、身辺でドイツ的教養に親しんでいたことも、その後の彼の進む方向に指針を与える動因となった。

最初に、フィロロギーなる学術部門の知識を与えたのが誰かと類推する時、Basil Hall Chamberlain (1850-1935) ではなかろうか、と推定される。Ernest Mason, William George Aston につぐ日本研究者にして、言語学を導入した英国人チェンバレンに学んだのは、文科大学に入学してからのことである。芳賀矢一は、チェンバレンの、特に明治16年(1883)発表の「古事記」の英訳と、その序論に記された日本上代の宗教思想に関する洞察に注目した。明治19年(1886)にこの英国人は文部省に招聘されて、帝国大学の文科大学の教師となり、博言学・和文学を担当することになった。その2年半後の明治22年(1889)7月に高等中学校を卒業した芳賀矢一が、文科大学国文科へ入学して来た。だが、この時代、和文学を選択した多くの学生には、訓詁学に終始する和文学を学ぶということは、時代遅れの児戯に思われたという。芳賀矢一にとって、国文学を学習するということは、家学を継承することを意味したけれども、皇学の副読本として読まれる以外は同国人からも殆ど黙殺されて来た『古事記』を、異邦人から泰西の異質な学術方法で学ぶという風に、国学とは異質な文献学的な関心からテキストを校訂する仕事はまことにエキサイティングな学術に思えた。またチェンバレンが日本の近代文語についてまとめた "A Simplified Grammar of the Japanese Language, modern written Style" (1886 刊) が文部省から「日本小文典」として上板されたが、この種の業績こそ、古来の邦国に皆無の分野で、泰西の斬新で魅力的な方法に基づく学術の新知識として魅惑的なものとなった。また大学入学の前年に著した英文を上田萬年との連名で公刊した「日本の古代語囊」の意図するところも、また口語の文法現象を説いた "A Handbook of Colloquial Japanese" (明21) も魅力的な仕事であった。芳賀矢一が帝大生となった翌年の著書 "Things Japanese" は外国人の見た日本の事象や人物はどのように映るのか、また日本人でありながら、それどころか、日本人だからこそ、無知のまま過ごしてきた言語知識を、諸藩のレベルから国家レベルの視野へ押し広げ、北のアイヌ語から南の琉球語へまで広がる博言学の領域は、まことに興味を惹いて飽きないものであった。無二の日本学研究者でもあったラフカディオ・ヘルンの親友でもあったチェンバレンは病

に倒れて文科大学を辞職して帰欧してしまった。新鮮な知識と方法を求めてやまない学徒として芳賀が学恩を享受したのは1年間にすぎなかったけれども、この恩師から「フィロロギー」の概念に付随して、さらに「国民文学」の理念をチェンバレンの一連の講義の中で接したのをはじめ、無尽蔵の金鉱山に踏み込んだ様な状態と考えてよかろう。

すでに留学前の講説中で、「このフィロロギー ( Philology) は The study of words, their sounds, origin, meaning, inflexion and usage,...<sup>(7)</sup>」であると、英字百科辞典から芳賀矢一は引用している。この用語を、当初、英文学の伝統に従って、狭義の言語学として理解した様である。だが、ゲーレイとスコットとの合著「文学批評の方法及び資料の序論<sup>(8)</sup>」の第1章に紹介されている諸家の研究を参照し、やがて旧大陸のフィロロギーの概念とその分野の拡大を知るに至る。そしてフィロロギーの発展過程の明確な知識を獲得出来たのは、ドイツ人の英文学者エルツェの「英吉利文献学綱要<sup>(9)</sup>」の序説を詳読した時点である。日本の国学者の末裔にとっては、特にエルツェのまとめがすこぶる有益で、のちに通読したベック (A.Baeckh) の研究書で同一主題の詳述を見出している。エルツェでは、文献学が、大方、文学中心、言語中心になっているとはいえ、それでも史学等の要素を含んでいることに気づいている。

英語学者フリードリッヒ・カルル・エルツェ (1821-1889) の手法は古代文献学者G.ヘルマンおよび特にA.ベックの方法と様式によって形成されたが、デッサウの高等中学校教師時代にA.Fuchs, F.Fiedler, E.Müllerという新文献学的研究者の影響下にあって、英国の文献学へ没頭した。研究中の英国文献学の意義をエルツェは「体系としての文献学について」で暗示的試行ですでに強調したが、英語学者として独自の方法で多面的な能力を繰り広げて行った。エルツェは判読と校訂を繰り広げる文献学と並んで文化学へ、テキストの歴史批判的な編集と並んで英文学のドイツ語訳へ、さらにドイツ語による最初のシェイクスピア像を描写した伝記学へ、さらに文学的な形態現象の探求へと没頭した。古い文献論者に帰属する言語学や雄弁術はエルツェには無縁だった。最高の専門家として、同郷の実業家エヘルホイザーと一緒に設立したドイツ・シェイクスピア協会の機関誌の専門発行人となったことが契機で、1875年に、彼はハレ大学に新設された英国文献学部門の助教授として招聘をうけ、翌年教授に昇任した。エルツェは研究者としても、教師としても、ベックの門弟であった。つまり、百科事典的なものへまで立ち入る体系学者であり、推論的なものへまで立ち入る実証主義者であった。

ところで、やがて、芳賀矢一がドイツ語知識から、手にした「ブロックハウス大辞典」の中に "Die Erforschung der geistigen Entwicklung und Eigenart eines Volks oder einer Kultur auf Grund seiner Sprache und Sprache und Literatur (言語並びに言語と文化とに基づく一民族または一文化の精神的発展および特性の探求)" という広義の文献学の解釈と解説が行われている実状に遭遇する。<sup>(11)</sup> やっと、ここで、旧大陸で主流をなす「古典学とか文献学とかの謂である」究極的な意義に心をうたれた。つまり、「このヒイロロジーと云ふものは、言語と文学との土台の上に、一民族若しくは一文化の精神発達と特性との所謂国学若しくは古学の意味に相当する。古くフムボルト (Wilhelm von Humboldt) が其を『国民性の学』 (Wissenschaft der Nationalität) と解した精神と変りは無い<sup>(12)</sup>」と語る箇所に出会ったのである。フンボルトの言葉が芳賀矢一を通じて齎されるのもいささかも不思議ではない。なぜなら、フンボルトはベックの職場の親友にして同行者と呼ぶべき同僚であったからである。そして、究極的に、芳賀矢一はベーゼッケの「独逸文献学」<sup>(13)</sup>を通じて、漸く言語研究、文学史研究こそフィロロジーの主要部門であって、結局、文献を総合的に思量する見方をするものであるという認識に到達したのである。

さて、カルルスルーエに生まれた古典学者アウグスト・ベック (1785-1867) は、ハレ大学で F. A. ヴォルフやシュライエルマヘルのもとで学び、1807年に博士となり、ハイデルベルク大学で教授資格を得て、同年助教授になった。彼は、ブレンターノ、アルニム、ゲーレスやティーク達と親交を結んだ。1809年にハイデルベルク大学の正教授に昇任し、1811年にはベルリン大学へ移り、ヴィルヘルム・フォン・フンボルトと一緒に共同研究を行なったりした。フンボルトの感化を受けて学部長や学長を歴任し、諸学の充実繁栄に尽力した。本来、彼は古典ギリシャ学者として古代研究の歴史的・古書的研究方法を追求した。古代研究というものを彼は恩師ヴォルフ以上に言語学からギリシャ人達の物心のあらゆる部門へ拡張し、そして歴史的な古典学へと結び付けた。彼のライヴァルであるゴットフリート・ヘルマンの言語的・テキスト批判的な方向に対して、事実文献学派の頂点に立った。包括的な文化史的な立場から、古代精神の芸術的表出に対する彼の関心も高まる。彼の仕事は、基本的には、当代の古典的・文献学的な研究に対するばかりではなく、同時に古代ギリシャの音楽芸術からアテネ人の国家財政や経済生活全般にわたるまでの現代的、学究的な視点からの探求となった。その尚古主義のより高次のギリシャ像から写実的な



描写への道程を示した著述は画期的なものであり、また古典古代の碑銘学への基礎を創り、その業績は、彼の無数の教え子を通じて19世紀の古代学や歴史学へ強烈に影響を及ぼした。

ここで、古典古代部門と対照的に、ベルリン大学の文献学に、とりわけドイツ学近代部門に貢献した人物、近代ドイツ文芸学への道を拓いた学者ウイルヘルム・シェーラーを忘れるわけにはいかない。ドイツ近代文芸学の祖ウイルヘルム・シェーラーは、1841年オーストリアのシェンボルン市に生まれ、1854年にヴィーンのアカデミー高等中学校で、教師 Karl Reichel の感化をうけて、Herder の「理念」や Jakob Grimm の著書、Gervinus の文学史に熱中した。また文学史家でもある Julian Schmidt を中心にする雑誌『国境の伝令』で展開された自由な大ドイツ主義の原理に共感していた。つまり、オーストリアではなく、プロイセンの指導の下でドイツ統一を願う思想を抱き、政治的精神的支援を少年期から惜しまなかった。メッテルニッヒの時代からオーストリアを覆っていた反動的精神に反逆していた。とりわけハプスブルク王家に対する無条件の恭順とカトリック教会の支配を批判した。宗教は神話と迷信の領域に属し、精神的な進歩の強力な障害をなし、それだけにこの精神的進歩はもっぱら自然科学の実証的な方法で実現出来る様に思えるのであった。逆に、全てのドグマが迷信に基づく結論づけている。この思考はドイツに組織された宗教がいつも文学的な創造力を阻害してきたという主張に基づくものであった。

シェーラーは1858年にヴィーン大学に入学して、Bonitz, Vahlen, Pfeiffer というドイツ文献学者の講義を受講したが、早くも不満と苛立ちを覚えた。そこで2年（4学期）後、ベルリン・アカデミーのゲルマニスト Karl Müllenhoff のもとへ移り、ミュウレンホーフの方法を学ぼうとし、厳密な文献学的方法を習得する厳格な師伝を見た。またランケやヤーコップ・グリムの警咳に浴したり、若い学者仲間のヘルマン・グリム、ウイルヘルム・デイルタイや法学者A.ボレティウスと知合った。また中年となった文学史家ユーリアン・シュミットや歴史家テオドル・モンゼンも時折現われた。ところで、ヴィーン大学フランツ・プファイファー教授が創刊した雑誌『ゲルマニア』で、その方法がシェーラーと同一視されたラッハマンとミュレンホーフに対する論駁で、相当非難された。そして1865年にシェーラーがヴィーン大学の講師職に応募した折、プファイファーに反対され、翌年、やっと私設講師として採用された。1868年、プファイファーの死とともに最終的障害が無くなり、27歳のシェーラーはヴィーン大学のドイツ語学・文学の教授に採用された。この時代の主要な成

果は著書『ドイツ語史について』（ベルリン、1868）である。本質的には、文法書でありながら、革新的なプログラムを含み、比較言語的で歴史的なアナロジーの広範な用法を挙げている。ここで、彼は比較言語的な発達の妥協の無いまでの原因となる見方を要求し、そして比較言語学的な法則と国家性格との間の緊密で必然的な結び付きを指摘した。1870年の普仏戦争の勃発の際、ヴィーンにおけるプロイセン勳員のシェーラーの立場を困難にしたが、反面、新たに設立されたシュトラースブルク大学への招聘受諾を容易なものにした。1864年まで遡る一連の講義とエッセイに加筆し、また幾つもの新しい素材と共に、一般的な性格を持つ著作の形で、『ドイツとオーストリアにおける精神生活史に関する講義及び論文』（ベルリン、1874）を公刊した。また1874年にテン・プリンクと共同でシェーラーは一連の『ゲルマン民族の言語史及び文化史に関する出典と研究』を発表した。これはシェーラー学派が文献学的寄与を果たす出発点になった。シェーラーの弟子で最初の協力者となったのがエーリッヒ・シュミットであり、アンドレアス・ホイスラー等の門人が続くが、1918年にその戦列は消える。シュトラースブルク時代のシェーラーの興味は、歴史的な文法よりも文学史へ移り始めた。1877年にミュウレンホーフの助力で、憧れのベルリン大学へ転任した。

ドイツ学、即ちドイツ文献学は、ドイツ語およびドイツ文学の原初から現今までの全体をあらわすものである。ドイツ学全体の中で、やがて領域の2分割が現実的にドイツの全大学で行なわれ、独自の講座でドイツの文献学は「古代部門」と「近代部門」となって姿をあらわした。ベルリン大学のこの新教授職ポストはシェーラーのために用意されたものであったけれども、ゲーテ以降まだアカデミックな、価値がある研究とは看做されなかった現代文学を包括する領域のものであった。講義者としてのシェーラーの表現力と言葉の優雅さは、彼の名声を高め、文学部学生を魅了した。シェーラーは、大胆に社会的現象と文学との間の直接的結び付きを重視した。つまり、社会的現象によって文学は予め避けがたく規定されていると看做した。またさらに彼は自然科学的な因果律を情熱的に信じた。全てのドグマは迷信に基づく結論づけた。この考えはドイツにおける組織化された宗教がいつも文学的な創造の妨げになっていたという主張にまで導いた。

芳賀矢一が訪独した時のベルリン大学においてシェーラーが育成していた文献学の部門は、かつての古い文学テキストに対する単なる従事ではなく、その領域を拡大し、芸術、宗教、政治、社会学、歴史学を含めた全ての事実を重視

した。フィリップ・アウグスト・ベックは著書《Enzyklopädie und Methologie des philologischen Wissenschaften》(Leipzig 1877)の中で、文献学が言語学的視野のもとで、古文書の研究に限定されていなければならないということを拒否している。その代わり、文献学は国家全体的学問であるべきで、これは言語学、批評、文化史また他の諸々の部門を包括するものである。ベックはジャムバチスタ・ヴィーコの“Scienza Nuova”(1725)の最も重要な原則を根拠にして、一般的な「周知の学問」の『不可能な』目標のために尽力した。<sup>(14)</sup> シェーラーの伝記的研究に関連して、文献的研究の限界があるか、ということに対しては否定的で、「真理そのもの、真なるもの、確実なものを求める努力」に異論を唱えることはなかった。<sup>(15)</sup> 文学外の要素と文学作品の固有データとの結合支援を見付ける課題は、吟味を必要としない様な一種の直覺的なヴィジョンへ向けられるようになった。シェーラーによれば、その様な因果の順序の発見が文学史家の最高の課題である。従って、他の部門からうまれた事実の積み上げは、しばしば研究されるべき文学作品よりも大きな意義を持っている。小論文が試みられるとき、文学史家あるいは文学批評家は、自らの仮設の構成を発展させるために、多分、もっぱら事実の貯蔵庫から選び出さざるをえなくなる。そしてあくまでも、もっぱら基礎をなす「自然科学的」な法則が真に有意義なものとして看做されることになる。

シェーラーの自然科学の一切を包括する力に対する信頼は無限であった。シェーラーはトーマス・バククルの唯物論に従い、ミルを経てオーギュスト・コントへ至る英国の実証主義の使徒達を賛嘆し、そして英国の唯物論的な原理を、一般的使用の形式に採用したけれども、レオポルト・ランケの様なドイツの歴史家達が英国の歴史家達に優るという見解を持っていた。シェーラーによれば、ドイツの進歩は主として「歴史における偉大な調和」の発見にあり、また「一定の期限内における最高の力の発展の時点及びその規則的な反復に」あるというのである。<sup>(16)</sup> 文学的、また歴史的な学問の道具としてのアナロジー使用は、シェーラーによれば、ドイツ的な寄与であって、経済史家ロツシャーと文学史家ゲルヴィーヌスを念頭に思い浮かべている。

ところで、シェーラーの熱心な擁護者のひとりで文学史家のユーリアン・シュミットはシェーラーの予め捉えた理念が、しばしば一面的で、事実の誤った選択へ導き、「この演繹法の熱望が余りにも事実の選択を規定した」ことに気付いていた。<sup>(17)</sup> デイルタイもシェーラーの方法がそのまま文献学の発展のために大いに貢献したとは評価していない。だが、デイルタイはシェーラーの一種の

精神的な英雄主義を是認する。その英雄主義は、文学における経験的な事実の助けをかりて因果結合をつくり出すシェーラーの努力にあらわれたと考える。<sup>(18)</sup>

さて、シェーラーの最も傑出した弟子のエーリッヒ・シュミットはどう考えたかを見てみよう。シュミットは巨匠の実証的な方法を支持しているけれども、それらの方法の使用にある危険性を意識した。シェーラーのあまりにも急ぎすぎて全面的に支持出来ない様な知的構成へ導く「騒擾的な大胆さ」について、シュミットは語る。<sup>(19)</sup> 具体的には、1879年シェーラーはゲーテの『ファウスト』の原像について散文形の仮説をたてた。<sup>(20)</sup> そして1887年にシュミットは『ウルファウスト』の写本の有名な発見をしたが、この写本のおかげで、シェーラーの推測が誤りであることを立証した。それにもかかわらず、シェーラーの死後、控え目に、いくぶん非論理的に書き記している。「『ウルファウスト』の発見は、多くのものを明らかにし、多くのものを紛糾させた。そしてシェーラーが、例えば自らの散文ファウストの大胆不敵な仮説を、まさしくこの発見を目指して断念しなければならなかったのだ、とは私は思わない。<sup>(21)</sup>」そのリアクションにもかかわらず、シェーラーの信奉者達は、さらにシェーラーの方法を支持し続けた。しかしながら、シェーラーの死後編まれた『詩学』では、シェーラー学派に相当の当惑と防御へ馳せらした。シェーラー学派は20世紀まで続いたが、重要な新しい運動はすでに1890年から成果を挙げた。シェーラー学派の最後の代表者は、恐らく1942年に死亡した Edward Schröder の名前を挙げる事が出来るであろう。

最初のシェーラーの門弟で、シュトラースブルク大学でも、ベルリン大学でも巨匠の後継者となったエーリッヒ・シュミットは、1853年にイエーナに生まれ、1875年にヴュルツブルク大学の講師となり、1877年にシュトラースブルク大学の教授となった。1880年にヴィーン大学へ移ったが、5年後ワイマールのゲーテ文庫の館長となった後、1887年にシェーラーの在任するベルリン大学の教授となった。名高いシェーラー学派の一員として、シュミットはシェーラーの歴史学的・文献学的方法を、文字通り古典時代の人物像や問題へ適用した。シュミットは明敏なテキスト批評を行い、偉大な文学を綿密に説明し、国際間の関係を探求した。諸詩人の全集編纂に多数参加したが、特記すべきことは1906年から1913年に逝去するまでゲーテ協会の会長を務めたが、すでに「ゲーテ協会の刊行物」の中で、第2巻として "Tagebücher und Briefe Goethes aus Italien" (1886)、第8巻として "Xenien 1797" (1893) 及びシュミットによって発見されて名付けられた "Urfaust" (1887) をこの悲劇の最古の形

で出版したことであり、「ファウスト」の第1部と第2部を原典批判の上でワイマール版のゲーテ全集の第14巻と第15巻で(1887-88)、またコッタ社の記念版の第13巻と第14巻で注釈付きで(1903-06)公刊したことである。またワイマール版では、シュミットは改訂者、監修者として、また "Quellen und Forschungen zur Sprach- und Kulturgeschichte der germanischen Völker" (1898-1913) や "Palaestra" (1889-1913) の叢書にも関与したことである。

ここに至っては、日本の若い文学研究者の新しい文学と文学史の研究法の習得に出かける留学先はドイツ国のベルリン大学以外ではありえなかった。芳賀矢一が「明治33年6月文学史攻究法研究の為満1年半独国に留学を命ぜらる」とき、9月8日に北独ロイド社のプロイセン号(3,278トン)に乗船して、大学生時代からの友人である第一高等学校教授の藤代禎輔を初め、留学生として夏目漱石、稲垣乙丙(農学)、戸塚機知(軍医学)の4名が同行していた。しかもフンボルト大学の別称をもち、かつてアウグスト・ベックも学長を務めたベルリン大学では、その伝統の下でこの時期、文献学的、歴史学的研究の全盛期で、上記の Erich Schmidt が主任教授を務めていた。彼は授業で「若いゲーテ」を取り上げていたが、文学史家でもあり、演劇学者でもある Max Herrmann (1865-1942) の文芸学の授業は、ゴート語から中高ドイツ語の時代からレッシング、クライスト、ゲーテに至るテーマに広がっている「新高ドイツ語研究の歴史的概論」「劇場史演習」「文学批評」等を講じ、R. M. Meyer (1853-1913) は「ドイツ小説史」「比較文学の方法と課題」を論じていた。さらに研究室にはレッシングの著述と文学に対する批判的な編纂と出版で目覚ましい成果を挙げ、文献学的な新分野を拓いた Karl Lachmann (1793-1851) の胸像が飾られていた。

文部省からの留学生であるドイツ文学の藤代禎輔とドイツ語の山口小太郎が、芳賀矢一と共に、現在の文学部ドイツ文学科に相当する Philologie (言語文芸学) へ学生登録してくれたことは学業の上でも私生活の上でも好都合であった。芳賀壇編「芳賀矢一文集」(昭12.2、富山房)所収の「留学日誌」によれば、彼等と市内トルム街の中等高等学校やコッホ街の実科高等学校を訪問して授業参観したり、また巖谷小波著「洋行土産」によると、漢字で表した地名伯林の最初の文字を左右に分けて命名し、小波が主宰する句会「白人会」に、生地福井市街を貫流する九十竜川に因んで名付けた竜江の筆名で芳賀矢一は参加したりした。この時期、巖谷小波はベルリン大学付属の東洋語学校の講師とし

て滞在し、宗教行事である花祭りをドイツ人との交流のために発起人となりしいた。初めベルリン西北部に位置する Gerhardtstraße 1、次いで Paulstraße 24 に居住した芳賀矢一は、近所に住む藤代禎輔とは殆ど毎日の様に顔を合わせていたが、東京外国語学校の山口小太郎、学習院の大村仁太郎、藺田宗恵（仏教学）、福原鏡二郎（教育学）、立花銑三郎等もベルリンにいた。そして彼等と一緒に繁華街のウンター・デン・リンデンやティアガルテンの公園内を散策したり、馴染みのレストランやビア・ホールで息抜きしたり、郊外の湖に遠出して英気を養ったりした。またシェーラーの高弟である演劇史のキヨステル教授を慕い、藤代禎輔がライプチヒ大学へ移ると、そこには姉崎正治、服部宇之吉、金子馬治、山口小太郎、谷本富等がおり、また同地にまた滝廉太郎も滞在していたが、芳賀矢一も藤代禎輔を通じて彼等と交わっている。

ベルリン大学のシュミット教授のもとでドイツの文献学的、歴史学的研究は全盛期を迎え、日本からの若い研究者達も堅実で実証的な学風に感化を受けた。そしてこの様な伝統を持つベルリン大学で芳賀矢一は、意識してあるいは意図せずして、幸運にも文献学の学統へ結びつくことになったのである。とは言え、芳賀矢一においても、この時点では、短期間で新時代に相応しい学風の紹介と日本的同化とを計る段階にあり、科学的で精緻な方法を習得し、優れた審美眼と透徹した判断力で解釈して総合する文芸学的な基本態度は未だ完璧には体得出来ていなかったことも当然である。それは、帰国後、明治36年12月に芳賀矢一がが国学院同窓会において持った講演を学生渋谷貞雄が速記記録したものに基づいて、「国学院雑誌」第10巻の第1と第2（明37、1-2）へ分けて掲載された「国学とは何ぞや」で留学前よりも明確な言語で語っている中で識ることが出来る。その中での最大の確信こそ、わが国の国学とは泰西の文献学（フィロロギー）に当たるという厳然たる事実であった。

この様に向け離れた和洋の学術の同一視は何処から生まれてきたものか熟考する時、すでに理想的理論の学術を虚構の座標に留まらせない英知が芳賀矢一に植え付けられていたことは、すでに述べておいた通りである。それこそ幼少期の教育環境の中にあつた。新たな立脚点より、彼は自信をもって明治40年度東京帝国大学での講義内容の表題に国学とフィロロギーを選んだ。そして芳賀矢一の死後、著述集が計画されたとき、遺された覚え書きと講義の受講者のノート記録を基礎にして遺著を上刊することになった。当初、日本文献学については高木武、日本漢文学史については佐野保太郎、文法論については島津久基、歴史物語については久松潜一、国語と国民性については守随憲治が分担す

ることになった。しかしながら、結局、『芳賀矢一遺著』で収録されたのは、日本文献学・文法論・歴史物語の3者のみであった。

今、我々の当面のテーマである国学と文献学について考究しながら、このエピソードに触れるとき、ウイヘルム・シェーラー（1641-86）が『詩学』を完成することなく逝去し、その遺志を継いで高弟リヒアルト・モーリツ・マイヤーが覚え書きと自らのノートから原稿をおこして編集した事実を想起せざるをえない。シェーラーは1884年から翌年にかけてベルリン大学で講義を行なった。引き続き刊行の準備を始めたが、1886年初冬に病に倒れ、同年8月には心臓発作に襲われて未完成のまま放置されることになった。結局、シェーラーは後事を詩学のゼミナールに出席していたマイヤーに託した。彼は1885年の講義ノート、当初構想されていた覚え書き、また聴講を共にした数名の仲間のノートに依拠して、時には病氣中の教授に問い合わせ、時には僅かながらも補完しながらシェーラーの死の2年後、1888年に完成させた。このエピソードは『芳賀矢一遺著』の場合を連想さす。

高木武の記録した「日本文献学」でも、芳賀自ら挙げた「コンサイス百科辞典」記載の英語文の知識、つまり、「用語、用語の音声、起源、意味、抑揚と用法……」という言語学的側面からのフィロロギーから出発するけれども、「ブロックハウス」から引用された「国民言語や言語と文学に基づく一国民または一文化の精神的発展と特性の探求」というフィロロギー本来の内包の拡大と確認に至った。ここで、ようやくフィロロギーの外延が日本伝承の国学の素地と合致することを再確認し、大きく肯首することができたのである。日本が最も封建的な藩政の階級社会から立憲君主制の近代国家へ脱皮しなければならぬとき、プロイセンを中核に多数の中小国家を同一言語と共通文化をもって、泰西で最も遅く国民国家として統一されたドイツの学術は、法制度や軍事整備ばかりではなく、国語教育を中心とする文化政策においても、日本人の中で、とりわけ愛国心に富んだ芳賀矢一の魂に直截に訴えくるものがあつた。プロイセンの精神生活の涵養にまことに尽力することのあつたヴィルヘルム・フォン・フンボルトの「国民性の学」こそ芳賀の理想と合致する標語となりえた。改めて、この時点で、強力に「国民言語」「国民文学」「国民文学史」という一連の概念が緊密に結びつきながら現われ来たのである。

芳賀矢一が偏狭な古学に執着することがなかつたのは何故かと考えるとき、まずこの時期、「国民文学」「国民文学史」の理念が臆気ながらも、素朴な形で念頭に浮かんでいたのではないか。そしてそれを先行するのが新時代の国語問

題であった。特に、それらの理念と切り離しがたく結びついた「国民言語」としての「言文一致」と文学表現が脳裏から離れることがなかったのではあるまいか。それは杉谷代水と共著で上梓した『作文講話及文範』の「序」の初めで「我が国早く六朝唐初の併儷文を学びて、国文の未だ発達せざりし以前、既に漢文の見るべきものあり。平安朝の世は、仮名文の進歩著しかりしが、鎌倉以後は此の二者相混和して、しかも国文の体は遂に四六文の羈絆を脱する能はざりき。徳川時代の学者唐宋文を師範とするに及びて、一新文体復起りて、やがて今日の普通文の基礎を成せり。国文の漢文と相倚る此の如き状勢なるに、明治以後更に欧文の句法の加入せるあり。文を行うの具亦文語と口語とに分る。されば現今の文体の多様多色なる、恰も現時の服装の千種万様なるが如く、之を学ぶもの、困難名状すべかららず。現時の教育界に於て作文教育の効果の挙らざるは、教授者の罪のみにあらず」<sup>(23)</sup>と語る。彼は純文学、教育界、一般社会の3つの対境を設定する中で、美文を目的にすることなく、また実用の普通文をも詳説し、三者分立の界域を撤して、調和をはかろうとする。漢籍を徹底的に排斥する和学中心の国学者の立場をとらない。そのことは新時代の国語問題で反映する。

芳賀矢一は国語問題のうち、文字の改良論に対しては慎重な対応をとるべき大事業と考えているけれども、「言文一致は之に比べれば容易でもあつて、又其便益は眼前に見えて居る訳故、今日の時機を外さず、ドシドシ抄取らせたいと思ふのが、私の意見である。世間には言文一致では、文章に品位が無くなる、冗漫になるなどいふ点から排斥する人もあるが、これは旧弊な漢学者が、漢文で無ければ文章で無いと考へて居ると同様の意見で、今の言葉で立派な文章の出来ぬといふ筈は決して無い。勿論今日の言文一致は、未だ立派な文学を持つては居らぬ。之は誰も之に構はぬからである。何人も其開拓に力を尽くさぬからである。文章家が文章に骨を折る程、言文一致体に尽力したならば、必ず立派なものが出来るに違ひない<sup>(24)</sup>」と、ベルリン滞在中に東京高等師範学校内の国語学会へ宛て寄稿している。国文学の衰微を恐れて言文一致に反対する人達とは全く対照的な立場で、国文学の将来のことを考えざるをえないのである。

「欧州留学中の所感」の中で、市民の衣食住の観察を通じて平等を痛感し、国民的に団結する有様を目撃して、教育と社会との観点でも、古典学というものは国民の発達、国民の心性的発達と結びついていることを表している。「国文の教授と云う側に於ても、今少しく親密に社会に結び付け、国民全体の思想の根本になつて居るものを採らねばならぬ。一方ではだんだんと所謂文芸教育



と云ふやうなことを奨励して、国民の思想を美しく、国民の理想を高めると云うことに力を尽くさなければならぬが、一方からは従来の国文学でも、もう少しは仕様がある様に思ふ。社会が、一般に同じ様に楽しみ、同じ様に団結してゆくといふ事は今後の理想である。……国語教育では方言を一ツにし同一の国語を話すという事も勿論必要だが、語学的方面ばかりでなくその内容精神の統一が最必要なのである」と切実に感じ、そして同時に次の様に反省する。「今日の国語教育と云ふものは果して能く其の目的を達して居るか。斯の如き重要な問題と云ふものは、全く忘れて居るではないか。或る一部の骨董的文学では決して今日国民に課すべきものではない。必ずや国民の精神界を支配する大勢のものでなければならぬ。今日までの国文の教授ほど可笑しなものはない。殆ど有ても無くても宜いかと思ふ。<sup>(25)</sup>」

芳賀は偏った古学を至上とする一部の国学者の様に漢学排斥論者とはならなかった。「明治維新までは、漢文を教育の正体と立てた日本国民がまだ国語がまだ国語の尊重に熟さないのは当然ともいえよう」と考える芳賀矢一は、ギリシャ・ローマの文化に圧伏されていたヨーロッパの人々を連想した。漢字を本字と称する時代が続く限り、芳賀が内容的には面白く読んだ政治小説「経国美談」(明16-17)も10年余後には考えられないほど仮名遣いや文法の誤謬に頓着せず、宛字が氾濫して不愉快であった。ところが、問題なのは文壇の大家と称せられている人々の著作中に現時点でも繰り返されている事実である。<sup>(26)</sup> 現代のみならず、後世にまでも保存されることを考慮するならば、往時の準則となっている法則を遵守すべきであるという立場を取る。古学者の様に漢字反対論者ではないものの、だが、格調を重んずる辞令の文章では、叙任の動詞が上にあり、下から上に返り読みにならなければならない因習を憂えている。漢字文化、中国文化の影響下にあった日本文化の再認識の手掛かりを人名の雅号や地名に因む同窓会名にみて、卑屈と愛敬の両極で推し測ったりしている。数か月後、再び「漢字活字の改鑄を望む」と題して、その冒頭で「漢字が我が国字となつて居ることは、今日の我が国家にとつては一つの禍である」と発言するとき、古学者の立場を表明するのかと眼を見張るが、そうでなく新時代の国語教育指導者の立場から、「これが為に、どの位、我が国の教育に骨が折れ、世界的競争の上に、損をして居るかは、今更いふまでもないことである」という前提から、上古に輸入し、使用を継続してきた漢字使用の突然の使用廃止は困難であり、「まず当分の中は、漢字を使用して居るものと、覚悟しなければなるまい<sup>(27)</sup>」と、妥協しながら、且つ、「就いては出来るだけ、これを簡便にして、

学ぶにも、使ふにも、容易にするような方法を考えなければならぬ。その一方法として、私は漢字を棒だけにしたいと思ふのである。棒だけといふのは、活字でいふゴシック体のやうにするのである。太い部分もなく、細い部分もなく、ハネる部分もなく、縦横の点もなく、点は点、棒は棒で、字画だけの形にしたのである」と言う。要するに、毛質の永字八法にみる様な漢字としての美や趣味を捨てて、字の形のみ見分ければ良いと考える単純な学童への配慮から生まれた着想である。

芳賀矢一が取り上げた棒引き仮名遣いが契機となって、6年教育用の第2回国定教科書が編纂されることになり、留学後、大正6年まで高野辰三、三上忠造、乙竹定造と共に尽力した。その国語教育に対する熱意は、この間に生まれた一女一男の双子に自ら国子と定と名付けたことでも反映している。

帰朝後、初めての講義は明治37年9月から翌年7月まで続く「日本国民伝説史」であった。日本の伝説やメルヘンを取り上げるとき、わが国で従来唱えられて来た国学者や歴史家等の説を顧みることなく、ゲルマニスティックの中心をなしていた「古代学」の研究方法を導入したものであった。つまり、ドイツ文献学の科学的研究方法を借りて、明治の「国学」を学術へまで高めることであった。しかし、彼は国学で終始するのではなく、先人の教説にしばられることなく、また独断に堕ちることなく、歴史学を初めとする補助学科で裏打ちしながら、実証的で科学的な研究方法に徹しようとした。そこで伝説とは何か、その起源発達について問い、伝説研究の手順と伝説の分類を試み、神話および太古伝説等にわたる問題点を掘り下げて芳賀矢一は講義した。具体的に「記」「紀」から「祝詞」「靈異記」「今昔物語」「風土記」「万葉集」等の物語や資料を文献学的に引用し、分析して整理し、学的に再構成して、一大国民伝説史を造形するほどの努力であった。文科大学の学生はもとより、当時理科大学の助手であった鳥居龍蔵たちは、世人が顧みない伝説の断片をも、研究方法によっては、忽ち立派な学術的な対象物と化して現われたことに感銘したと言う。

かつて芳賀矢一が師事した小中村清矩や物集高見という教授スタッフは近世以降の国学伝統を継承する傾向が見られたが、洋学の洗礼を受けた芳賀矢一は、彼等のように古代の理想像を追求することで終わるのでなく、未来の理想像を希求し、その大成を予見した。従って、些末主義的な考えでなく、また訓詁に陥ることなく、真の文献学に基づいて国文学研究の大道を拓こうとした。そして国語国文学を基礎に、日本人の国民性の発現を研究の対象にしたのである。

彼が最も感化を受けたベックの言葉を借りるならば、“Das Erkennen des Erkannten”によって、帰納法的にまた比較研究的に考究しようとした。古代の人々によって「認識されたものの認識」によって、文献を基礎に、民族固有な精神性や文化性を再認識して、理想的なものを科学の真実性で把握しようとした。彼の「日本文献学」は、あくまでも日本古代の国民文化の総体を明らかにする点で啓発的であった。そして彼の学灯は、確実に同学の後輩達に受け継がれて行った。

完

2001.8.30

#### 註

- (1) 芳賀矢一「国学史概論」(明33、11、国語伝習所) P.2f.

本来、神代紀を中心に置いて、古道を学ぶのが神学であり、神学者と称される者がおれば、官職、儀式、律令、つまり法制の学並びに故実、装束、調度、即ち故実の学という両者の有識の学問であり、有識家という者もおれば、六国史等を吟味する記録の学であり、記録家と呼ばれる者もおれば、詠歌と歌集編纂、および物語類の注釈、これらに携わることが歌学であり、その人が歌学者である。

この分類で国学の領域全体がうかがい知ることが出来るのであるが、真淵の門下の村田春海も、和学大概で、この領域を国史実録の学、律令典故の学、古言解釈の学の3分科とし、第3の学を重視している。宣長の弟子藤井高尚の書簡によれば、宣長の様に分科に偏することを避けて、歌学、文章、記録学問、神道学問の4分科であっても、有識と記録とを併せて一科とし、兼修を和学の本領としている。

- (2) 参照 小中村清矩 陽春芦雜考卷八「国学の前途」

- (3) 芳賀矢一「国学史概論」ibid. P.9.

- (4) 芳賀矢一『芳賀矢一遺著』昭3、10、富山房 P.1.

- (5) 参照 笠井助治「近世藩校の総合的研究」昭35、吉川弘文館；笠井助治「近世藩校に於ける出版書の研究」昭37、吉川弘文館；笠井助治「近世藩校に於ける学統学派の研究 上・下」昭45、吉川弘文館 等

- (6) 「国学者伝記集成」続編 昭10. 1、日本文学資料研究会編纂 国本出版社 354頁

- (7) "The Concise Encyclopedia"

- (8) C.M.Gaylay and F.N.Scott : An Introduction to the Methods and Materialsof Literary Criticism.

- (9) K.Elze: Grundriß der englischen Philologie. (1887)

- (10) K.Elze: Über Philologie als System (1845)

- (11) "Große Brockhaus" 1972 Wiesbaden S. 540.

- (12) 芳賀矢一「国学史概論」ibid. P. 5.
- (13) Vgl. G. Baesecke: Deutsche Philologie.
- (14) August Boeckh: Enzyklopädie und Methologie des philologischen Wissen-schaften ((Leipzig 1877) (zusammengestellt und herausgegeben von Bratuschek nach Vorlesungsnotizen seit 1801.) S.15; vgl: auch S. 11 und 13ff.
- (15) Aufsätze über Goethe. Berlin 1886. S.21.
- (16) Wilhelm Scherer: Kleine Schriften I, S.175.
- (17) Preußische Jahrbücher XXXV(1875), S.316.
- (18) Vgl. Wilhelm Dilthey, in : Deutsche Rundschau XLIX(1886), S.134.
- (19) Erich Schmidt: Wilhelm Scherer. In: Goethe-Jahrbuch IX(1888), S.259.
- (20) Scherer: Der Faust in Prosa. In: Aus Goethes Frühzeit, Straßburg 1879, S. 76-93.
- (21) Eich Schmidt, in: Goethe-Jahrbuch IX(1888), S.259.
- (22) 巖谷小波: 洋行土産 下巻(明治36.5、博文館) P.128.
- (23) 芳賀矢一・杉谷代水共著「作文講話及文範」(明治45、博文館)P. 1.
- (24) 芳賀矢一「言文一致について」(『教育学术界』(明治34.11) 第4巻第1号所収,) P.6.
- (25) 芳賀矢一「欧州留学中の所感」(『教育学术界』(明35.11) 第6巻第2号所収)P.105.
- (26) 芳賀矢一「漢字崇拜のなごり」(『帝国文学』(大7.7) 第24巻第7号所収) P.141.
- (27) 芳賀矢一「漢字活字の改鑄を望む」(『帝国文学』(大8.1) 第25巻第1号所収) P.113.